

2006年ワールド・ベースボール・クラシックに見る日韓一般紙報道比較

A Comparison of Coverage of the 2006 World Baseball Classic in Japanese and Korean Newspapers

1K03B091-0

佐々木 直

指導教員

主査 リー・トンプソン先生

副査 石井昌幸先生

目的

論文作成にあたり今まで自分が学んできたこと、関心のある分野が何か考え直し、それらを凝縮した論文にしたいと考えた。そこで浮かび上がったキーワードが「野球」「伝えること」「韓国」であった。野球は自分がスポーツに関心を持つ契機となり、学部では「伝えること」を学ぶために「スポーツとメディア」ゼミに所属した。また、2005年度には韓国で一年間学ぶ機会に恵まれた。これらキーワードを繋ぎ、浮かび上がったテーマが2006年に行われたワールド・ベースボール・クラシック(以下WBC)である。優勝した日本はもちろん、隣国である韓国でも多くの関心を集めた。中でも、日韓戦は三度行われ、いずれも両国にとって重要な局面での一戦となった。三度の直接対決に加え、両国のライバル関係から、相手に関する報道も多々行われた。では、国や新聞によりどのような違いがあったのだろうか。ひとつの出来事は、伝える側によってどのように変わるのだろうか。自国・相手国(日本から見て韓国、韓国から見て日本)の報道を中心に見て行きたい。また、本論文はどの新聞が良い報道をしたのか決めるものではない。報道された記事を元に、どのような違いがあったのかを調査したものである。

方法

- ・対象期間:2006年1月1日から4月30日
- ・対象新聞:産経新聞、朝日新聞、朝鮮日報、ハンギョレ

WBCが開催された2006年3月を含め、大会前後もどのように報じられたのか調べるため、上記期間を対象とした。更にこの期間を大会の進行順に沿って幾つかの期間に分け、章立ての軸にしている。新聞を選ぶ基準として、「全国紙」「一般紙」を掲げた。その中から一方の政治的立場に寄らない調査を念頭に置き、日韓の保守寄り・革新寄りを一紙ずつ、計四紙を決めた。これら四紙の見出し・本文・掲載面・中心人物・記事数・写真を比べ、各紙・各国にどのような特徴があるのか調べた。

第一章 <導入>

第一章では、本論に入る前に確認しておきたい項目を挙げている。第1節で新聞、第2節で今回の調査方法を説明し、第3節では2006年WBCを振り返った。第4節で日韓の野球人気に触れ、両国における野球の地位が異なることを示した。

第二章 <期間ごとの四紙報道分析>

ここでは調査期間を更に6つに分け、順に見てい

る。第1節の大会前では、日韓でWBCでの目標と新聞の記事数に差が現れた。日本の目標は世界一と明記されており、これに伴い記事も選手の調整段階から多数報じられた。対して韓国ではハンギョレが4強、朝鮮日報は台湾に勝ち、1次リーグ突破であった。記事数も日本に比べかなり少ないが、1次リーグの台湾・日本戦勝利、2次リーグでの米国・日本戦勝利(本章第2-4節)に伴い、記事数がどんどん増えた。中心となった選手は日本のイチローと韓国の海外組だった。内容面では日本は選手や試合について報じられることがほとんどだが、韓国は観客や街頭応援の様子などもニュースとなった。準決勝以降(第5章)や敗退後も盛り上がる韓国の様子を逐一報道したのが産経新聞で、これは朝鮮日報がイチロー発言に拘って伝え続けた姿勢と似ている。この二紙は相手国が自国にとって特別な存在である、という構図を常に保っている。

第三章<イチローの発言>

2月21の会見で飛び出したイチローの「30年発言」。元々イチローを中心に日本チームは報道されていたが、この発言を発端として、各紙・各国が、より一層イチロー報道に各自の特徴を見せるようになった。産経新聞は連日のように30年発言を記事中に含めて報道した。しかし朝日新聞は大会期間中で一度も発言を引用せず、他紙との違いが明らかになった。日本以上に韓国がこの発言に敏感だった。特に朝鮮日報は発言後イチローの言行に注目し、試合のない日でも関連記事を載せた。事は発言内容のみにとどまらず、イチロー個人の姿勢・資質に対しても評価が下されるようになった。日本では情熱的(産経)、仲間鼓舞(朝日)など、肯定的にとらえられたが、韓国の朝鮮日報・ハンギョレは否定的な立場をとり、特に朝鮮日報ではスポーツの枠を超えて、子育ての際の「悪い例」として登場する程であった。

終章

日本の二紙は互いに共通する部分が少なく、正反対の主張をすることも確認された。ただイチローの姿勢を評価する点は同じであった。韓国の二紙は当初WBC関連の記事が少なかった。しかし、韓国チームが快進撃を続けると報道料はどんどん増え、選手や試合を伝えるのみでなく、応援の様子を大々的に報じた。これは2002年サッカーW杯の影響も大きいと推測される。ここまで、WBCを二国四紙がどのように報道したのかを検証したが、同じ事柄でも伝えかた一つで、受ける印象が全く異なる事がわかった。